

「留学生交流拠点整備事業」に本学の申請事業が採択

関西大学・大阪大学の共同プロジェクト 多文化・多世代共存で北摂地域を元気に

国際化を通じて、北摂地域に新たな活力を――。

関西大学が大阪大学と共同で取り組む

「地域・企業・大学が連携『留学生の第二の故郷』実現への実践的調査研究：Harmonic Osaka・Multicultural Environs (H.O.M.E)コンソーシアムによる『先進のニュータウン、これからの50年』」が2012年9月、文部科学省の留学生交流拠点整備事業に採択された。

この事業は、大阪府北部(北摂)の千里ニュータウン地域(豊中市・吹田市)が誕生50周年を契機に展開する地域活性化事業(「千里ニュータウンまちびらき50年事業」)と歩調を合わせ、大学間連携がある関西大学と大阪大学が主体となって行うもので、これに地域産業・自治体に参加し、共に国際化を図ることで千里エリアの活性化を推進する。

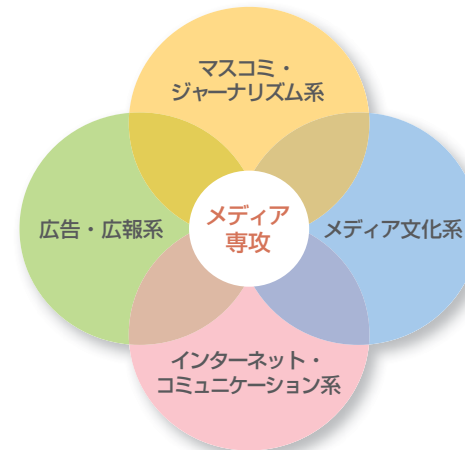
委託期間(3年)終了後も継続的かつ活発な「コミュニケーショ

ン(情報・知見・人材資源の共有)」がなされるような大学・地域・企業の連携によるコンソーシアムの結成と、活動を支える交流拠点の整備を行う。この拠点を通して、地域密着型の国際交流活動を推進し、留学生の生活支援(宿舍支援・就職支援)を行うことで、千里エリアが、外国人留学生らの「第二の故郷」となり、その結果街全体を活性化させることを目指す。本事業が着手するコンソーシアムの仕組みや実践検証の成果は、広く一般に公開し、また他地域の活動団体と積極的に相互学習を行うことで、全国への知見とノウハウの波及を行う予定だ。

具体的には、関西大学内に交流拠点オフィス、吹田市の千里ニュータウンプラザ内に活動拠点を開設し、専門のコーディネーターを常駐させ、大阪府や地元自治体、経済団体などと連携し、留学生に対し、日本人学生や地域住民との交流、地域での国際交流イベントなどの開催、企業でのインターンシップ、留学生雇用枠の拡大を促進する。

社会学部にメディア専攻が誕生

メディア社会で活躍できる人材を育成



メディア専攻の4つのアプローチ

デジタル化の進展、インターネットやモバイルメディアの発達・普及により、メディアを取り巻く状況が日々変化している中、関西大学社会学部メディア専攻が2013年4月からスタートする。メディア専攻は、社会学部のマス・コミュニケーション学専攻を改組。多様なメディアが遍在する「メディア社会」の特質を理解し、行動できる人材を育てることを目標に、より一層の充実をはかる。

メディア社会の特質について、多様な視点から学ぶとともに、各自の関心に依りてひとつの領域について専門的に学ぶ。そのために4つの履修アプローチを設定する。

「マスコミ・ジャーナリズム系」はマスメディアが現代社会に与える影響やその役割について考える。2年間の実践的な特別選抜プログラム、「ジャーナリスト養成プログラム」も受講できる。「メディア文化系」は音楽、観光、スポーツなど、メディアが生み出す豊かな文化の在り方を研究でき、「音楽・メディア研究プログラム」も開講される。「広告・広報系」はマスメディア広告に限らず、さまざまなメディアやコンテンツの中に存在する広告やPRについて、その効果や可能性を検証でき、「広告専門プログラム」も開講される。「インターネット・コミュニケーション系」は、情報社会における新しいコミュニケーションの形について研究を進める。どの履修コースも、プロフェッショナルが指導する豊富な実習科目を取りそろえている。



H.O.M.E. 街づくり構想

Harmonic Osaka・Multicultural Environs

北大阪・千里の地域・企業・大学が連携した、「留学生の街」実現への実証研究

留学生が魅力を感じ、ここで住みたい・働きたいと思わせる地域ぐるみの交流事業としての「留学生の第二の故郷」プロジェクト

「千里ニュータウンまちびらき50年事業」と歩調を合わせた、これからの50年を見通した地域の国際化



H.O.M.E. 千里交流拠点オフィス
関西大学 国際部 交流室内
H.O.M.E. 活動拠点
千里ニュータウンプラザ多目的ルーム、会議室等

[Harmony]

●多文化多世代同居によるニュータウン再生

[Project Advancement]

●グローバル人材育成・活用の進歩
●若者の交流・定着を促す地域との連携

[Output]

●産学連携・地域連携のサイクルの定着を狙った、実践的調査研究成果の発信

[H24年度11月]

「千里ニュータウンまちびらき50年事業」国際フォーラム開催

[H25年度・26年度]

外国人留学生雇用に関心を持つ企業を招へい「キャリア・カフェ」を主催

日本人学生+留学生+地域住民=H.O.M.E.



エッジ効果抑制理論に基づき、世界初の製品化

遮音壁用先端改良型減音装置「デュラカムE-fX」
関西大学と日本板硝子環境アメニティが共同研究・開発



従来の先端改良型減音装置(左)から「デュラカムE-fX」500タイプへの置き換え。すっきりした景観が実現(イメージ図)

関西大学と日本板硝子環境アメニティ株式会社は、河井康人環境都市工学部教授が解明した独自のエッジ効果抑制理論に基づいて共同研究・開発を行い、遮音壁用先端改良型減音装置「デュラカムE-fX」を世界で初めて製品化し、2012年11月から販売を開始した。

これまで道路や鉄道、建築などの騒音対策として、多数使用されてきた遮音壁。その高さを抑制しながら遮音性を高める

装置として、遮音壁の頭上部に取り付ける先端改良型減音装置が設置されてきた。しかし、装置が大きいため、景観を損ねたり、車がぶつかって壊れてしまうなどの問題を抱えていた。

「デュラカムE-fX」はエッジ効果を抑制する理論に基づき、従来と比べてシンプルな仕様、形状化に成功。高性能な減音性能を確保したうえで、小型・薄型・軽量の三拍子そろった性能改善を実現したため、製品化に踏み切った。

エッジ効果とは、河井教授が音場の理論解析の過程で解明したもので、遮音壁の頭頂部のごく近傍で、空気粒子速度が非常に大きくなる現象のこと。この現象に対して、適切な流れ抵抗を持つ材料を、遮音壁の頭上部(エッジ部)に設置することで、エッジ効果を抑制し、遮音壁の頭上部を回って伝わる音のエネルギーを小さくできる。

通常の3m遮音壁は、遮音壁がない時に比べて15dB程度騒音レベルを下げる事ができる。遮音壁の高さを変えずに、最上部をH=500タイプの「デュラカムE-fX」に付け替えることで、さらに5dB程度下げることができる。これは5mの遮音壁と同等の遮音性能となる。関西大学生まれの世界初の新技術、その普及が期待される。